

ほど、分化度が低いほど陽性率は高くなるが、本症例では分化度は高いものの腫瘍の大きさ、深達度が強い集積に関与したと考えられる。消化管原発の腺癌の診断において<sup>67</sup>Gaシンチグラフィはあまり有用性が評価されていないが、強い集積を示した空腸癌の1例を経験したので報告した。

### 13. 全身性リンパ節腫大を伴ったシェーグレン症候群の一例；<sup>67</sup>Gaシンチグラフィによる経時的評価

清水 正司 渡部 直人 将積 浩子  
 蔭山 昌成 金澤 責 豊嶋心一郎  
 富澤 岳人 亀田 圭介 平尾 謙  
 瀬戸 光 (富山医大・放)

症例は40歳、男性。主訴は両側顎下腺および涙腺腫大、頸部およびえき窩リンパ節腫大、乾燥症状であった。外来初診時の<sup>67</sup>Gaシンチグラフィでは両側顎下腺、涙腺および縦隔への集積増加が認められた。外来通院中に全身性リンパ節腫大の増悪が認められ、<sup>67</sup>Gaシンチグラフィの再検査では縦隔への集積増加がさらに亢進していた。当院内科入院精査の結果、症例はリンパ増殖性疾患の合併が強く疑われたシェーグレン症候群であった。<sup>67</sup>Gaシンチグラフィは唾液腺の炎症の活動性の評価だけでなく、シェーグレン症候群におけるリンパ増殖性疾患の合併の診断とその経過観察に有用であると考えられた。

### 14. RIによる大腸通過時間の検討——慢性特発性偽性腸閉塞症の2症例——

大野 和子 倉部 輝久 鈴木賢一郎  
 梶原 顕彦 堀 浩 村田 勝人  
 伊藤 要子 綾川 良雄 宮田 伸樹  
 (愛知医大・放)  
 山本ゆかり (同・二内)

慢性特発性偽性腸閉塞症(CIIP)は、反復してイレウス症状を呈するにもかかわらず機械的に閉塞を認めない原因不明の症候群である。本邦では過去19年間に54例が報告され、死亡例は約16%である。近年はcisaprideが有効な治療薬とされているが、自覚症状軽減後も腸管内のガス残存が多く、的確な効果

判定は困難である。われわれは、本疾患が疑われた患者2名に対して、RIを経口投与後経時的に撮像することにより、上行、横行、下行、S状結腸、直腸の各通過時間を測定した。本法による機能的な大腸通過時間の定量は、CIIPの診断および治療効果判定に有効と思われる。

### 15. 一回および二回採血法による血漿クリアランスの測定(第一報)——<sup>99m</sup>Tc-MAG3および<sup>131</sup>I-OIHとの比較——

金澤 責 清水 正司 蔭山 昌成  
 亀田 圭介 富澤 岳人 豊嶋心一郎  
 渡辺 直人 瀬戸 光 (富山医大・放)

一回採血法、二回採血法によりMAG3とOIHのクリアランス値を算出し、一回と二回採血法との間の相関、MAG3とOIHのクリアランス値の間の相関を検討。また同時にMAG3/OIHクリアランス比も求め、検討した。対象は19~28歳の腎疾患を有しない健康者13名。一回採血法と二回採血法とで比較したものではどちらも良い相関を示したが、MAG3とOIHクリアランス値とを比較したものでは、相関係数は0.7程度でややばらつきが認められた。MAG3/OIHクリアランス比は、一回採血法では0.63、二回採血法では、0.72となった。